

SHOW HEYシネマルーム

★★★★★

パール・ハーバー

2001 (平成13) 年7月14日、9月10日鑑賞

Data

監督：マイケル・ベイ

出演：ベン・アフレック／ジョシ

ユ・ハートネット／ケイト・

ベッキンセル／アレク

ク・ポールドウィン

👁️👁️ みどころ

戦闘シーンは、すごい迫力。一方で微妙な3人の恋愛模様。しかし、ちょっと御都合主義・・・？また日本軍の描き方は陳腐。好き嫌いは分かれるが、一見の価値あり。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

<ど肝を抜く戦闘シーン>

2001 (平成13) 年7月14日、日本で封切られた「パール・ハーバー」の予告編は、2000年の暮れからやっていた。そして何回も観た予告編は、しだいに詳しいものになっていった。そのため、「この映画は絶対に・・・」と思っており、封切りの初日、1人で映画館に入った。事前に、「パール・ハーバー」に関する映画評論には目を通していたが、とにかく自分の目で観ないことには・・・と思っていた。

映画が始まってから1時間足らずの間、勇敢なパイロット、レイフ (ベン・アフレック) と、美しい看護婦イヴリン (ケイト・ベッキンセル) との恋愛ストーリーが続く。2人の運命的な出会いと別れ、そしてイヴリンとの手紙のやりとり、そして、イヴリンを支えるレイフの親友ダニー (ジョシュ・ハートネット)。開放的で遊び好きなヤンキーたちの、意外に (?) 真剣な恋愛模様が描かれる。しかし、何となくその出会いは、唐突。そして、お互い魅かれあっていくプロセスも、こんなに簡単に女がモノにできるのか、と思えるほど、わりと単純。主役3人の男女の気持ちの動き、そして結びついたり、別れたりする男女のドラマは、最後まで、何となくシックリこない。

イギリスでのレイフ死亡の知らせを、親友ダニーから聞いたイヴリンは、しばらくして、

その傷を癒すかのようにダニーと結びつく。そして、妊娠を知ったその日、死んだ筈のレイフが帰ってくる。そこで男同士の間にも生まれる、イヴリンをめぐる葛藤。しかし、そんな男女の問題や、アメリカ人1人1人の生き方を、根本的に変えることになった運命の日。1941年12月7日（現地時間、日本時間では8日）。真珠湾は、日本軍の奇襲を受けた。

延々約30分にも及ぶ戦闘シーンは、CG（コンピューター・グラフィック）を駆使したすごい迫力だ。とりわけ、後に真珠湾における太平洋艦隊の象徴となった戦艦「アリゾナ」へまっすぐに落ちていく1発の爆弾や、巨体を横にして転覆していく姿など、映像は、これでもかこれでもかと、すさまじい場面を提供してくれる。そして日本軍の攻撃が終わった後の凄惨なシーン。真珠湾奇襲攻撃の実態を、映像を通じて実感するには、十分な時間であり、迫力である。しかし、新聞で読んだ映画評論に書いていた通り、何とも奇怪なのは、日本軍が尊皇攘夷の旗竿のぼりを立て、プールに軍艦を浮かべて作戦を練るシーンである。緊張の連続が続くシーンの中で、「そんなバカな！」と、思わず失笑してしまう。

<作品の価値は・・・>

この映画は、大きく分けて3部に分けられる。すなわち、第1部はレイフとイヴリンの恋愛ストーリー。第2部はハイライトの真珠湾攻撃。そして第3部は真珠湾攻撃の報復としての、アメリカ空母「ホーネット」に16機の爆撃機を積んでの、東京爆撃である。レイフもダニーも、真珠湾で戦闘機を飛ばした実戦経験を有するベテランパイロットとして、この東京爆撃作戦に参加する。この作戦の時のイヴリンの恋のスタンスは・・・？男の私にはよくわからないが、ダニーの子供をお腹に宿したイヴリンは、レイフにも、そしてダニーにも「愛している」と言って、2人を見送った。そして、無線を通じて「2人の」安否に聞きいった。そして結果は・・・。東京爆撃には成功したが、空母への帰還はありえず、当初の予定通り、中国大陸へ不時着した2人の機は、当然、日本兵に襲われ、結果的にダニーは死亡。レイフのみが生き残った。

映画の最後のシーンには、小さな、可愛い男の子が登場する。最初のシーンに、レイフとダニーの子供時代が現われるのと同じ描き方だ。当然、この可愛い子供は、ダニーを父親とするイヴリンの子供。そしてその側に立ち、子供に、「これから、飛行機に乗せてやろう」と言って、子供を乗せ、空を飛ぶのはレイフ。3人の幸せな、新しい家族が誕生しているのである。

途中、涙を流しそうになるシーンはいくつもある。現に、あちこちのアベックからは、涙ぐむ声や鼻をすする音が聞こえていたが、私は何となく泣くことはできなかった。話はわからないことはないけれど、何となく・・・。こんなうまい話（都合のいい話）がある

の……。そういう感じを否定できなかったのである。

しかし、それはともかく、この作品は2001年の超大作。私は結果的に、2度この作品を観た。そして9月10日に2度目を観た直後の9月11日、「パール・ハーバー以来」という言葉が再三使われることになった、アメリカでの「同時・多発」テロが発生した。これも何かの因縁かもしれない。私にとって、この「パール・ハーバー」という映画は、一生忘れられないものになるだろう。

2001（平成13）年9月記

「パール・ハーバー」については、封切り前にK出版社に送ったが「お蔵入り」となった、私の映画評論があるので、これも転記しておく。

弁護士目での「映画評論」

弁護士 坂 和 章 平

2001（平成13）年5月記

『パール・ハーバー』——米空母上での大試写会を考える——

2001年5月25日全米で封切られ、7月日本で公開される『パール・ハーバー』の試写会が5月21日何とハワイ・ホノルルのパール・ハーバーの空母ジョン・C・ステニスの艦上で開かれた。題名どおりこの映画は、1941年12月7日の旧日本軍のハワイ奇襲攻撃を描いたものだが、ストーリーは二人のパイロットと看護婦の間の愛と友情を軸に描かれているとのこと。しかし、CGを駆使した日本軍飛行機（198機以上のゼロ戦による攻撃という誤った報道が再三なされていたのは失笑ものだが）による奇襲攻撃は約30分間にわたって描かれており、その「生々しさ」には圧倒されるらしい（ちなみにプライベートライアンもすごかったが）。

「リメンバー・パール・ハーバー」の合言葉で形成されてきた「反日感情」が今、あらためて復活する危惧がある。5月22日のTV、新聞は一斉にこれを大きく取り上げ、宇和島水産高校の実習船えひめ丸が米潜水艦に沈められた今年2月の事故（事件）とダブらせて「なぜこの時期に？」と問題提起していたが、これは多少こじつけの感がある。そうではなく、この映画は小泉内閣が発足し、80%という高支持率の中で今議論となっている日米安全保障問題や憲法（9条）改正問題を考えるきっかけとして価値のある作品だ。工藤夕貴が主演し、1999年に上映された『ヒマラヤ杉に降る雪』は、パール・ハーバ

一奇襲を境に、強制収容所に入れられた日系女性とアメリカ軍人との悲しい恋を描いた秀作だ。これはストーリーが多少暗いこともあってかアカデミー賞（作品賞）獲得とはいかなかったが、戦後55年の節目の中、日米関係を考え直すきっかけとなった重要な作品だ。

今年7月日本で大公開される『パール・ハーバー』は、単なる恋愛モノとして、ましてや「戦闘シーンはすごかった」という満足感だけで見て欲しくない。

昨今の、日米（えひめ丸事件等）、米中（米中軍用機接触事故、台湾の陳水扁総統の訪米、台湾への武器輸出）、日中（李登輝へのビザ発給問題、歴史教科書問題、セーフティガード問題）関係の緊張関係という重大な国際情勢の中、そして小泉「改造漸行」内閣で問題提起されている、日米安全保障問題、憲法改正問題を真剣に考えるきっかけとなる作品として是非考えるべきだし、そういう目でみれば大きな価値のある映画だ。

6月の日本での試写会を観たら、さらにつつこんでこの映画について弁護士の目から紹介したいと考えている。

以 上